

中国語天津市薊県方言における「没」の声調と文法化¹

王海波

oukaiha@gmail.com

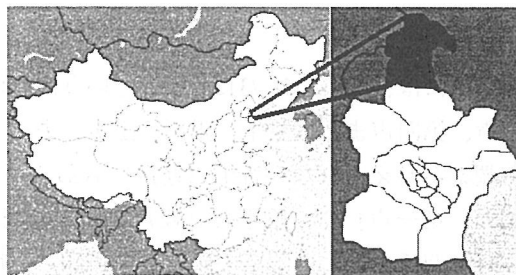
キーワード：薊県方言 トーンサンディ 文法化 音韻的句

要旨

中国語の「没」の動詞から完了相否定標識への変化は文法化と考えられる。標準語ではこの文法化に発音の変化が伴わないが、天津市薊県方言では次のような音韻的独立性の低下が伴う。薊県方言の陽平は [35] と [55] と [22] で現れる可能性がある。後に去声が来る場合、常に [35] になる。この場合を除き、音韻的句を単位として後に声調を持つ音節が無い場合は [22] になり (e.g. 紅[22]了[0]#, 紅[22]#)、有る場合は [55] になる (e.g. 紅[55]旗[22]#)。薊県方言の「没」も [35] と [55] と [22] で現れる可能性がある。後に去声が来る場合を除き、アクセントを持つ「没」は、動詞の場合 [22] であり、独立した音韻的句を為し (e.g. 没[22]#銭[22]#)、完了相否定標識の場合 [22] とはならないため、独立した音韻的句を為さない (e.g. 没[35]来[22]#)。

1. 薊県方言の声調の概要

薊県方言は、中国天津市薊県(図 1)で話される中国語北方方言のひとつの変種である。薊県は行政上では天津市の一部であるが、薊県方言は天津市中心部で話される天津方言の一種ではなく、冀魯官話区保定唐山片方言の薊県遵化小片と呼ばれる変種である(薊県志編修委員会 1991:899)。薊県方言の音韻論に関する先行研究には薊県志編修委員会(1991)以外に、支建剛(2007)、支建剛(2008)、支建剛



中国大陸 天津市薊県

図1

(2009) が挙げられる。しかし、先行研究には、薊県方言の「没」の声調と文法化に関する考察が見つからない。そこで、薊県方言の「没」の声調と文法化を考察するために 2011 年 8 月と 2012 年 8 月に薊県出身の王慶宏氏(50 代男性)、李淑傑氏(50 代女性)、王振坤氏(20 代

¹ 本稿は 2011 年度日本中国語学会第 6 回関東支会における同題目の口頭発表に基づいて作成したものである。本稿を執筆するにあたり、小林正人先生に貴重なアドバイスを頂いた。この場を借りて小林正人先生にお礼を申し上げたい。

男性)、高茜氏(20代女性)を調査した。本論文で扱うデータは全て筆者の調査による。

中国語標準語と比べ、薊県方言には以下の特徴が挙げられる。

[1] 音素と音節構造

薊県方言の音素は標準語の音素とはほとんどかわらない。しかし、標準語における音節構造が $(C_1)V(C_2)$ であるに対し、薊県方言における音節構造は $C_1V(C_2)$ である。すなわち、onset が義務的に現れる。V が a, o, e である場合の例を (la) に挙げた。一方、V が i, u, ü の場合、標準語ローマ字の正書法でそれぞれ yi, wu, yu と書かれるように、渡り音 [j], [w], [ɥ] という onset がついている可能性がある。それが原因か、薊県方言では、この場合、通常は新たな onset が加わらない(1b)。しかし、少数の例外においては、「[j]+母音」の前にも onset が加わる例がある(1c)。

	漢字	標準語など	薊県方言	意味
(la)	愛	ai	<u>n</u> ai	愛
	藕	ou	<u>n</u> ou	蓮根
	餓	e	<u>n</u> e	空腹
(lb)	一	yi [ji]	yi	一
	五	wu [wu]	wu	五
	魚	yu [ɥ]	yu	魚
(1c)	言語	yanyu [jɛn.ɥ]	<u>n</u> ianyu [njɛn.ɥ]	物を言う
	夜兒個(児)	yerge [jɛɪ.kə]	<u>l</u> ierger [ljɛɪ.kə]	昨日

[2] 声調

標準語には、/55/, /35/, /315/, /51/ という四つの声調素があり、それぞれ第一声、第二声、第三声、第四声または陰平、陽平、上声、去声と呼ぶことが多い。

声調素が与えられない音節(轻声)もあり、本稿でそれを [0] であらわすことにする。上記の「第一声」や「陰平」、「轻声」などの概念は標準語の声調のみならず、標準語の声調に対応関係を持つ中国語の諸方言の声調にも用いられる。

陽平の場合、標準語と薊県方言の間で体系的な相違点が見られる。本稿ではその相違点を根拠に、「没」の声調と文法化の関係を考察する。

2. 薊県方言における陽平

標準語の陽平 /35/ [35] は、薊県方言でどのようなピッチとなるかは後続する要素に影響される。また、ピッチの具体的な数値は先行研究によっても異なる。薊県志編修委員会(1991: 902-903)は、薊県方言の陽平は 22 となるが、陰平(55)・陽平(22)・上声(213)の前では 55 となり、去声(51)の前では 13 となると記述している。支建剛(2007: 14,18-19)は、薊県方言の陽平は 33 であり、上声(214)と去声(51)の前では 35 となると記述している。支建剛(2007)

は、陰平と陽平の前における陽平のピッチに言及していない。筆者が先行研究をふまえて薊県方言の陽平のピッチを調査した結果、概ね薊県志編修委員会(1991)の値に一致していたが、去声の前における値は支建剛(2007)と一致した。

上記の内容をまとめると次表のようになる。

表 1 異なる研究者による薊県方言の陽平のピッチの記述

	基本	陰平の前	陽平の前	上声の前	去声の前
薊県志編修委員会(1991)	22	55	55	55	13
支建剛(2007)	33	未言及	未言及	35	35
筆者	/22/	[55]	[55]	[55]	[35]

先行研究の薊県志編修委員会(1991)と支建剛(2007)は陽平のピッチ値と変調の環境の関係について表 1 のような記述をしている。しかし、どのような場合において基本の 22 (または 33) で発音されるかは具体的に言及していない。また、表 1 における「陰平の前」などのところで陽平と後続する音節の間に音韻的句という境界線の有無に関しても言及していない。そこで、この 2 点を含めて、薊県方言の陽平についての筆者の調査結果を次のように考察する。

2.1. 直後に去声が来る場合

薊県方言では、直後に去声がある場合、陰平と陽平のどちらも常に [35] として現れる。この環境においてすべての陰平が義務的に [35] に交替する現象は、薊県方言の特徴である。標準語の場合、この現象は「一」などに現れうるが、規則的な現象ではない。例えば、「医院」は標準語では yi [55] yuan [51] であり、薊県方言では yi [35] yuan [51] となる。

薊県方言における上記の現象は普遍的であり、音韻的句 (phonological phrase) の境界線の制限がない。すなわち、直後の音節が異なる音韻的句にあるものである場合においても発生する。例えば、次のような例がある。

- (2a) 快喫 kuai /51/ chi /55/ [55] 「はやく食べて」
 快喫這個 kuai /51/ chi /55/ [35] zhei /51/ ge /0/ 「はやくこれを食べて」
- (2b) 快來 kuai /51/ lai /22/ [22] 「はやく来て」
 快來這邊兒 kuai /51/ lai /22/ [35] zhei /51/ bianr /0/ 「はやくこちらに来て」

2.2. 直後に去声が来ない場合

直後に去声が来ない場合、薊県方言の陽平は、[55] または [22] で現れる。

音韻的句を範囲として後ろに声調を持つ音節がある場合(=場合 1)においては、[55] となり、音韻的句を範囲として後ろに声調を持たない漢字しかない場合(=場合 2a)、または音韻的句を範囲として後ろに何もない場合(=場合 2b)においては、[22] になる。例を次表にま

とめた。

表 2 蕪県方言の陽平の実現の例 (直後に去声が来る場合を除く)

		漢字	蕪県方言	意味
場合 1	音韻的句を範囲として 後ろに声調を持つ音節がある場合	紅旗	<i>hong</i> [55] <i>qi</i> [22]	赤旗
場合 2a	音韻的句を範囲として 後ろに声調を持つ音節がない場合	紅了	<i>hong</i> [22] <i>le</i> [0]	赤くなった
場合 2b	音韻的句を範囲として 後ろに何もない場合	紅	<i>hong</i> [22]	赤い

2.3. 強勢が関わるか

蕪県方言ではフォーカスに強勢²が来る。上表では、場合 1 と場合 2 にある例の強勢（下線の部分）が異なる。そのため、上記の例だけでは、陽平の実際の音声学的現れ方の区別は、強勢を持つか否かによる可能性も否定できないと考えられる。次では、(i) 音韻的句の範囲における声調を持つ音節の有無と、(ii) 強勢の有無、という 2 つのパラメータで四つの可能性を分けてみる。結論から言うと、表 3 のようになる。例文は表 2 の下に挙げた。

表 3 蕪県方言の陽平の実現 (直後に去声が来る場合を除く)

	強勢が陽平の音節に 来る場合	強勢が陽平の直後の音節に 来る場合
場合 1 音韻的句を範囲として後ろに声調を持つ音節がある場合	強勢を持つと、次の音節の発音が声調を失っていると考えられるほど弱くなり、場合 2 になる。(例 3a)	/22/ → [55] (例 3b)
場合 2 音韻的句を範囲として後ろに声調を持つ音節がある場合	/22/ → [22] (例 3c)	(なし)

² 強勢と声調とは音声的実体が異なる。強勢は音節上におかれる音声の強さのことであり、声調は弁別的な特性を持つ音声の高低のパターンである。

- (3a) zhei shi hongqi haishi lanqi
これ である 赤い旗 或いは 青い旗
「これは赤い旗か青い旗か」

hong [22] qi [22]>[0]
赤い 旗
「赤い旗」

- (3b) zhei shi honglingjin haishi hongqi
これ である 赤いスカーフ 或いは 赤い旗
「これは赤いスカーフか赤い旗か」

hong [55] qi [22]
赤い 旗
「赤い旗」

- (3c) ni shi chi yu haishi chi xia a
君 強調 食べる 魚 或いは 食べる えび 助詞
「君は魚を食べるか、えびを食べるか」

chi yu [22]
食べる 魚
「魚を食べる」

2.4. まとめ

上記の分析に基づいて薊県方言の陽平の実現を次のようにまとめた。

(4a) /22/ → [35] / _.(#)[51]

(4b) /22/ → [55] / _.'(…)# (σ ≠ [0] or [51])

(4c) /22/ → [22] / _.' # (σ) or _'[0] # (σ ≠ [51])

(4a) は、音韻的句の境界線(#)の有無を問わず後ろに去声 [51] が来る場合、陽平 /22/ は [35] として実現する、ということを表す。

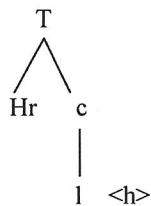
(4b) は、音韻的句の境界線(#)内において後ろに轻声 [0] と去声 [51] 以外の声調を持つ音節が来る場合、陽平 /22/ は [55] として実現する、ということを表す。(4b) の場合、強

勢は陽平の次の音節に来る。

(4c) は、音韻的句の境界線(#)内において後ろに何もなく、同境界線の次に去声 [51] がない場合、または後ろに軽声 [0] しかない場合、陽平 /22/ は [22] として実現する、ということを表す。(4c) の場合、強勢は陽平に来る。

Chen (2001) が言及した声調の幾何的表示 (geometrical representation) を用いると、(4c) で示した薊県方言の陽平の基本の [22] は次のような形式で表せると考える。Hr は register が high であること、l と h はそれぞれ low と high を表す。この場合、陽平は l として現れるが、潜在的な <h> が l の後ろに存在すると考えられる。

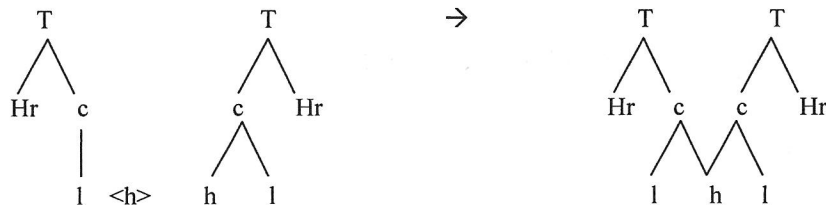
(5) [22]



(4a) と (4b) で示したように、この潜在的な <h> は後ろに [51] が来る場合、または音韻的句を範囲として後ろに声調を持つ音節が来る場合に現れる。

(4a) の場合は次のようである。

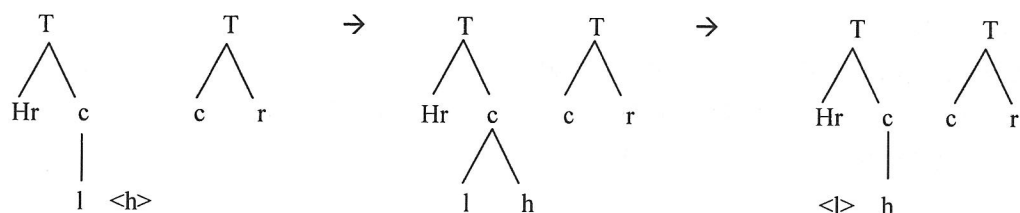
(6) [35]



(4b) の場合においても潜在的な <h> が現れるが、l が現れなくなる³。

³ 陽平の l が現れない現象は、北京官話にもある。Chen (2000: 299-306) は H と T (T は声調を持つ音節を表す) の間における MH が H となる現象を T2 Sandhi と呼んでいる。H と T の間における MH の M は H_H に位置することによりなくなり、結果として MH が HH となると解釈している。但し薊県方言の場合、この現象における環境の制限が比較的緩く、陽平の前に来る H が必須ではない。

(7) [55]



(4) のまとめに基づいて、次のようなことを主張したい。

(8a) 直後に [51] が来る場合を除き、陽平 /22/ が該当音韻的句の最後の声調を持つ音節であれば、常に [22] として実現する。

(8b) 陽平 /22/ が [22] として実現することは、その音節が該当音韻的句の最後の声調を持つ音節であることを示す。

3. 薊県方言における「没」の発音

標準語と薊県方言のどちらにおいても、「没」という漢字が存在し、主に次のような2つの働きをする。

(i) 存在の否定（～が存在しない）。この場合、「没」は名詞とともに現れる。

(ii) 完了の否定（～していない）。この場合、「没」は動詞とともに現れる。

標準語では、上記の2つの働きをする「没」のどちらも声調が [35] である。次は薊県方言の「没」の声調の考察である。

3.1. 「没」の後に去声の音節が来る場合

薊県方言で「没」直後の音節が [51] である場合、常に [35] として現れるかどうかを調査したところ、次表のような結果が得られた。

表4 薊県方言における「没」の声調（直後に去声がある場合）

	意味	漢字	発音	
			強勢＝ 「没」の次の音節	強勢＝「没」
名詞後続	電気がない	没電	(a) <i>mei</i> [35] <i>dian</i> [51]	(b) <i>mei</i> [35] <i>dian</i> [51]
動詞後続	換えていない	没換	(c) <i>mei</i> [35] <i>huan</i> [51]	(c) <i>mei</i> [35] <i>huan</i> [51]

強勢が名詞に来る場合、フォーカスは名詞にある。例えば、(a) の場合は、「何がないか？

電気がないか、それとも糸がないか？」の返事「電気がない」である。(c) の場合は、「君がさっき言ったのは『換えていない』か、それとも『返していない』か？」の返事「換えていない」である。

強勢が動詞に来る場合、フォーカスは動詞にある。例えば、(b) の場合は、「電気はあるか、それともないか？」の返事「電気はない」である。(c) の場合は、「君は換えたか、それとも換えていないか？」の返事「換えていない」である。

表 4 から分かるように、「没」の後ろに来る音節の声調が去声 [51] である場合、「没」の意味が存在の否定か完了の否定か、「没」に強勢が来るか否かを問わず、「没」の声調の音声学的実現が一律に [35] である。

3.2. 「没」の後ろに去声の音節が来ない場合

蕪県方言の「没」は、後に来るのが [51] 以外の音節である場合、どのような声調を取るかを調査すると、次のような結果が得られた。

表 5 蕪県方言における「没」の声調（直後に去声がない場合）

	意味	漢字	発音	
			強勢＝ 「没」の次の音節	強勢＝ 「没」
名詞後続	金がない	没钱	(a) <i>mei</i> [55] <i>qian</i> [22]	(b) <i>mei</i> [22] <i>qian</i> [22]
動詞後続	来ていない	没来	(c) <i>mei</i> [55] <i>lai</i> [22]	(c) <i>mei</i> [35] <i>lai</i> [22]

強勢が名詞に来る場合、フォーカスは名詞にある。例えば、(a) の場合は、「何がないか？金がないか、それとも舟がないか？」の返事「金がない」である。(c) の場合は、「君がさっき言ったのは『来ていない』か、それとも『行っていない』か？」の返事「来ていない」である。

強勢が動詞に来る場合、フォーカスは動詞にある。例えば、(b) の場合は、「金はあるか、それともないか？」の返事「金はない」である。(c) の場合は、「君は来たか、それとも来ていないか？」の返事「来ていない」である。

表 5 からは次のようなことが分かる。

名詞後続の場合、強勢が名詞に来れば、「没」が [35] となるが、強勢が「没」に来れば「没」が [22] となる。動詞後続の場合、強勢が名詞に来れば「没」が同じように [35] となるが、強勢が「没」に来れば「没」は [35] となる。

3.3. 「没」の音韻的独立性

本稿で考察するのは、「没」の音韻的独立性と、「没＋名詞／動詞」における音韻的句の

境界線との関係である。そのため、音韻的句の境界線を慎重に検討する。後ろに去声が来る場合、音韻的境界線の有無を問わず「没」が一律に [35] となるため、考察外とする。

名詞が後続する場合、[22] が可能である。前述した (8b) により、名詞が後続する「没」は独立した音韻的単位であり、「没+名詞」は二つの音韻的句をなす。それに対し、動詞後続の場合、[22] がありえない。(8a) により、動詞後続の場合、「没」は常に一つの音韻的句をなしている。これを次の (9) のように表すことができる。

(9a) # 没 # Noun # e.g. # 没 # 錢 #

(9b) # 没 Verb # e.g. # 没來 #

つまり、「没+名詞」にある「没」は「没+動詞」にある「没」より、音韻的な独立性が高いと考えられる。この音韻的な独立性の差が、「没」の発音に現れていると説明することができる。

3.4. 「没」の形態論的地位：文法化の現れ

「没+名詞」にある「没」は、存在を否定する意味を表す動詞であり、具体的な意味を持っていると考えられ、内容語 (content word) と言える。「没+動詞」にある「没」は、完了を否定するものであり、アスペクトに関わる要素であると考えられ、機能語 (function word) と言える。通時的には内容語から機能語への移転は、文法化の典型的な例である。

同じ現象は「了」にも現れる。「済ます」という意味を表す「了」(e.g. 草草了事「いい加減に事を済ます」) は内容語である。完了相という文法的な機能を果す「了」(e.g. 來了「来た」) は機能語である。「済ます」という意味から完了相という文法的な機能への移転も文法化の例である。標準語の動詞の「了」と接辞の「了」はそれぞれ liao [315] と le [0] と発音されるため、標準語における「了」の文法化は音韻上にも現れている。しかし、標準語の「没+名詞」にある「没」と「没+動詞」にある「没」のどちらも mei [35] と発音されるため、標準語における「没」の文法化は音韻的には現れていない。

薊県方言において、強勢を持つ「没」は、名詞後続の場合 [22] であるが、動詞後続の場合 [22] がありえないため、音韻的独立性の下降がうかがえる。この音韻的独立性の下降は、薊県方言における「没」の文法化の音韻的現れと考えられる。

標準語と都県方言の「了」と「没」における文法化の音韻的現れの有無を次表にまとめた。

表 6 標準語と薊県方言の「了」と「没」における文法化の音韻的現れの有無

			標準語	薊県方言
了	文法化前	動詞「済ます」	liao [315]	liao [315]
	文法化後	完了相	le [0]	le [0]
	文法化の音韻的現れがあるか		+	+
没	文法化前	動詞「ない」	mei [35]	mei [35]/[55]/[22] 音韻的独立性が高い場合([22])がある
	文法化後	完了相の否定形		mei [35]/[55] 音韻的独立性が高い場合([22])がない
	文法化の音韻的現れがあるか		—	+

表 6 からわかるように、薊県方言の「没」は文法化に伴い、音韻的独立性の低下が見られる。この現象は標準語には見られない。

参考文献

- Chen, Matthew Y. (2000) *Tone Sandhi*. Cambridge: Cambridge University Press.
 薊県志編修委員会 (1991)『薊県志』天津: 南开大学出版社/天津社会科学院出版社.
 支建剛 (2007)『薊県方言語音研究』天津師範大学碩士學位論文.
 支建剛 (2008)「薊県方言音系及其語音特点」『山西大同大学学报(社会科学版)』2008.6:77-80
 支建剛 (2009)「古入声字在薊県方言中的演变」『唐山师范学院学报』2009.3:12-14

The Tone and Grammaticalization of *mei* in the Jixian Dialect of Chinese

Wang, Haibo
oukaiha@gmail.com

Keywords: Jixian dialect, tone sandhi, grammaticalization, phonological phrase

Abstract

The change of *mei* as a verb to *mei* as the negation marker of the perfective aspect is considered to be grammaticalization. In standard Chinese *mei* does not change phonetically in this process, but in the Jixian dialect *mei* as the negation marker of the perfective aspect is phonologically less

independent than *mei* as a verb. The *yangping* tone of the Jixian dialect has three phonetic possibilities: [35], [55] and [22]. When followed by the *qu* tone, it is [35]. In other cases, when not followed by a tone-bearing syllable within the phonological phrase, it is [22] (e.g., *hong*[22] *le*[0], *hong*[22]), and when followed by a tone-bearing syllable within the phonological phrase, it is [55] (e.g., *hong*[55] *qi*[22]). *Mei* in the Jixian dialect has the same three phonetic possibilities. Except when followed by the *qu* tone, accented *mei* as a verb is [22] and forms an independent phonological phrase (e.g., *mei*[22]#*qian*[22]#). However, *mei* as the negation marker of the perfective aspect is never [22], which means it never forms an independent phonological phrase (e.g., *mei*[35]/*lai*[22]#).

おう・かいは（東京大学大学院言語学研究室博士課程）

